

龍ヶ崎が誇る風景画家

5月。新緑の季節である。四季の風景は山や川、あるいは何気ない田圃や畑で彩られている。この配置は、日本中、どこにでもある。見慣れているから、当たり前景色と映る。しかし、龍ヶ崎市が生んだ画家、服部正一郎は、そんな見慣れた景色にこだわって絵を描き続けた。日本芸術界の最高峰・日本芸術院の会員となった服部をそこまで惹きつけた身近な風景とは何だったのだろうか。

服部正一郎は、明治40年(1907)、稲敷郡龍ヶ崎町(現 龍ヶ崎市)に生まれた。少年時代から絵を描くことが好きだったようだ。地元の旧制龍ヶ崎中学(現 茨城県立竜ヶ崎第一高等学校)に進学。弓道部で活躍したとされる。卒業後は画家を目指し、「日本美術学校」へ入った。昭和4年(1929)同校洋画科を卒業。第16回二科展に出品した「ぶどう棚」が初入選している。

日本美術学校卒業生には、服部と同じく日本芸術院会員となった土浦市出身の洋画家、

鶴岡義雄(1917-2007)、同じく日本芸術院会員、福岡県出身の画家、織田廣喜(1914-2012)らがいる。服部は卒業後も二科展に出品を続けた。二科展は大正3年(1914)、文部省美術展覧会(通称文展)から分かれた展覧会で、美術団体の二科会が主催している。

二科会評議員に推挙された服部は、その後の評価を不動のものとした作品「水郷」を昭和42年(1967)開催の第52回二科展に出品する。これが翌年(1968)、日本芸術院賞を受賞した。

題名となった水郷は、霞ヶ浦一带に広がる見慣れた景色である。しかし、服部はいう。「水郷情緒にきびしさはないというけれど夕立の黒雲がもたらす気象風景は強く素晴らしいものだし、冬枯れの芽、真菰、西風が白波する濃紺の水面、渡る人がいない橋・・・等は人の心をえぐっていくものだと思う」。

彼は次々と郷土の風景を絵にした。龍ヶ崎市役所に飾られている「筑波」は手前に桜川

服部正一郎

Hattori Shoichiro

が流れ、遠くに筑波山がみえる。母校竜ヶ崎第一高等学校にも見慣れた風景「筑波山」の絵がある。同校校長室脇の廊下がギャラリーとなっている。「牛久沼湖畔の松」、「稔の秋の遠筑波」など合わせて4点の作品が展示されている。アトリエを構えた取手市にも市役所秘書課脇廊下に2作品が展示されている。

一連の作品を見ると、絵の具の緑が特徴的だ。彼自身「一時代私の心は緑に濡れて緑ばかりの絵を描いて、色盲ではないかと心配されたほどだった」と記す。

なぜ、緑色だったのか。緑は風景を描く時の「原点色」だったのではないだろうか。緑を通してみる景色は、四季を背景に考えた際、常緑樹を除くと、緑の葉はやがて茶や黒茶の落ち葉になる。緑は変わりゆく自然の象徴である。

身近な風景はいつも単純だ。素朴でもある。なんの変哲もない。しかし、風景は何かを語ってくれている。見慣れた風景が対象化された時、人は初めてその画面の奥に潜んでいる自然の摂理に気づかされるのかもしれない。昭

和62年(1987)、日本芸術院会員に就任。平成7年(1995)、この世を去った。(敬称略)

※主な参考文献

「竜一コレクション～白幡台の芸術家たち～」(公益財団法人龍ヶ崎市まちづくり・文化財団発行)、「いまに輝くふるさと龍ヶ崎の先人たち」(龍ヶ崎市発行)、「成田山奉納記念服部正一郎回顧展図録」(成田山新勝寺発行)



「筑波山」(手前)など4点が展示されている竜ヶ崎一高の廊下ギャラリー＝龍ヶ崎市平畑(筆者撮影)

偉人から読み解く「深緑」のヒント

歴史ジャーナリスト

茨城県郷土文化研究会 会長
ヒタチノデザイン研究所 所長

富山章一